あさ 10

2023

亀田虎童子

老いてゆく猛暑日の爪切りながら

殴られて帰る猛暑の影法師

つまらなき日なりと言へぬ猛暑かな

猛暑日の思ひあぐねし手を洗ふ

猛暑日の思はず洩らすひとり言

あを

十月集

一蚕壺３

佐藤　竹僊

さきざきのかの木この木も若葉咲く

ひまはりも風に戰いでみたいのに

バス停にスマホのひとり萬緑裡

茅葺に夏雲が乗る夏休

かなかなを聴こえませぬかと云はれけり

初風に禮を失スル網戸とは

右上のいちばん搖るるねこじゃらし

片顔は月の裏側獺祭忌

円い山四角い山と秋の暮

明治屋と明治座前と望の月

ほたる草足形土器のこぶりにて

一葉づつそれぞれうごき葛の原

葉月

長崎桂子

朝より今日も無事にと麦茶のむ
週に二回の買物や炎暑の町
涼欲しき標識に気を使ひつつ
白南風や跣で波打際ゆく
白南風に手足をかざす昼さがり
葉月の満月や煌々と涼し
夜更け雲追ひちらす月葉月四日
艦載機の奇襲よみがへる敗戦日
地球の気候異常や盆墓参
強風に夜どおしの雨台風来

雑詠

森なほ子

緑蔭にブルドーザーの赤潜む
涼風や開かずの窓を抉じ開けて
みんみんのたうたうけふは鳴かざりき
またしても鉢の梔子丸坊主
芋虫に断固スプレー二度三度
スプレーに反る芋虫や顔歪む
夕蜩葉の一枚も動かざる
夕菅の咲いて夕餉のこと思ふ

小菅村五句　他

赤座典子

急斜面に掛軸畑秋晴るる
特産の鹿肉料理道の駅
ドローンの実験飛行秋真昼
山澄めり村人六百五十人
大菩薩峠仰ぐや秋うらら
暗き夜の漸く終る敗戦日
秋暑し故人が主役の再放送
お父さんが干す三人分の浮き輪
そろそろだよねとうわさをすればだだちゃ豆
高齢者健診済みぬ秋日傘

晩夏光

秋川泉

草しげる廃墟の中の観覧車
大型犬大声でよぶ浮輪の子
少年の片腕だけの日焼け跡
晩夏光カイトサーフィン宙返り
大はしゃぎ五右衛門風呂の日向水
夕暮れて密と番する守宮かな
落蟬の強く鳴きては手を離れ
遠花火両手の荷物重くなり
夜も更けて船いっぱいに烏賊を上げ
月涼し小犬のねむる長廊下

槍

七郎衛門吉保

三伏や憲法前文読み返す
丹下さんの願ふ広場や原爆忌
熱波にも命名せむと終戦忌
澤地さんの伝ふ戦禍や紅の花
露国にも届け「清」の大花火
墓石にも白日傘差し供花も笑む
鉄路旅に想ひを馳せし糸瓜かな
大曲五重芯変化菊の秋
秋夕映入道染めて明王に
東欧に槍一本や天高し

空調服

篠田純子

がうがうと空調服のすれ違ふ
付け爪の落ちてる銀座晩夏光
瑠璃色の蝶たもとほる潦
鬼灯市白き花咲く鉢求む
茅の輪の香頭を垂れ夏越祓受く
「に」の字母は「丹」か「爾」か議論秋暑し
シオカラ蜻蛉水に尾を漬けつつ低空

魔法の氷

篠田大佳

暗記の古語はアイスコーヒーにじむ
サイダーが喧嘩の中に立つてゐる
目覚めると悪に生まれる秋の朝
八月や死語の手帳に平和の字
目を瞑る理由を問はず敗戦忌
木道の木の板腐る暑し暑し
発熱外来盛んなる秋暑かな
秋暑し魔法の氷溶けかけて

スーパーブルームーン

須賀敏子

新築の家に赤ちゃん秋初め
朝顔や今朝は真白き花二輪
涼風を待ってスタート六千歩
ジッジッと短く鳴いて秋の蟬
三度目の富士登頂や友八十路
ベランダでスーパームーン八月尽

雑詠

都築繁子

蓮の葉の重しほっほつ花開く

秋暑し地に寝転べるホームレス

お目当ての館晩夏の工事中

残暑見舞いの手描きのハガキ休らへり

仲見世や若き男女の浴衣かな

人混みを抜けて参拝秋暑し

八月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

芦千本葭切一羽かくまへり　　亀田虎童子

葭切は葭の葉茎に巣材を絡めて巣を作り、雛を育てる。近場で荒川区にある尾久の原公園に蘆原がある。そこでヨシキリの声を聴いた。きっとその蘆原に巣もあるのだらう。「アシ」は蘆・葦・芦・葭と漢字がある。「ヨシ」とも読む。面倒な植物である。『大字源』の力を借りる。〈芦〉は〈蘆〉の俗字。〈葦〉は〈蘆〉の成長したもの、〈葭〉は〈葦〉のまだ穂を出さないもの。とある。俳句で使ひ分けるのは至難。

掲句は無数の芦が数を頼んでヨシキリを守ってゐる様子描く。〈芦〉と〈葭〉と使ひ分けて遊び心満点である。〈千〉と〈一〉を一句に登場させ、面白さを倍加する。言葉遊びのやうで実を捉らまへた一句である。（喜孝）

鬼やんま翅音たてて引返す　　亀田虎童子

鬼やんまは一定区間を行ったり来たりして虫を捕らえる習性がある。その軌道をターンする時の微かな音を詠んでおられます。私も昔、鬼やんまが空中でカサッという乾いた音を立てるのを何度も聞いたことを思い出しました。御高齢の作者の遠い記憶を生き生きと詠まれています。（なほ子）

水飲んでから考へる暑さかな　　亀田虎童子

極限状態で状況を俯瞰したり、不安になったりする暇がなく、命の危機を脱してから、あの時は危なかったと考えることができるという状況を読みます。命の危機を覚える暑さ、水を飲んで危機を脱した時に暑さのことを考えられるのです。年々暑くなる夏、二〇二三年の夏は特に実感が湧きます。（大佳）

シャンパンが待ってゐさうで髪洗ふ　　佐藤竹僊

「シャンパン」「髪洗ふ」の作用で私はこの句が若い女性の立場で作られたのかな、と思ってしまった。先生のイメージと合わない。だが、一晩たって読み直すと自分の先入観に過ぎないとわかった。シャンパンを手に入れた作者が、風呂上がりの乾杯を楽しみにいつもより念入りに髪を洗っているという句なのだと。「ビール」ではつまらない。「待ってゐさうで」も絶妙。（なほ子）

焼野原平和はじまるゴロ野球　　佐藤竹僊

少年の目で見た「焼野原」は希望に満ちていて、一切の曇りがありません。本格的な野球ではなくて、ゴロ野球に興じる様子に、子どもたちの幼さを想像して、平和への思いがよりまっすぐに伝わってきます。（大佳）

公園のその捩花は抜かないで　　須賀敏子

公園の管理上、植物の植え替えがあったのでしょうか。作者の思い入れのある捩花が、何らかの理由で抜かれそうになっている。抜かないでという切実な気持ちをストレートに表現することで、捩花への想い、中止を求める声、それらが強く伝わってきます。（大佳）

カーペット外し畳の夏来る　　須賀敏子

夏が来た。昨年の秋、寒くなる前に畳の上に敷いたカーペットのモヤモヤ感が気になりだす。そこでカーペットのお役御免と片付ける。そこに半年ぶりに畳が現れ、部屋の雰囲気が一変する。足で目で夏の来たことを知る。「畳の夏」とは面白い表現だ。この文を読む頃はカーペットが敷かれ畳は見られないことだらう。四季を楽しんでをられる。日本でしか出来ないたのしみかもしれない。が、テレビで将来日本は二季になるだらうと喋ってゐた。（喜孝）

梅見れば梅を買ひをり余白の日　　都築繁子

休暇は、英語でvacationと言いますが、それを直訳すると「余白の日」と言うことができそうです。英語の感覚では、何もしないことに価値があるそうで、作者も頭を空っぽにするためにふらりと梅を見に出かけて、なんとなく気に入った梅を買ったと読みました。良い休日の過ごし方だと思います。（大佳）

茅の輪くぐり異国の人も楽しさう

都築繁子

夏越しの祓に茅の輪を潜る慣はしがある。神社に茅の輪があるとくぐりたくなる。異国の人も楽しさうに潜ってゐるといふ。潜り方は神社によって作法があるさうだ。私の潜った最後は湯島天神だったと思ふ。昔々吟行で埼玉県飯能市の竹寺に行った。先輩の俳人が茅の輪の茅（ち）の語源は血だよと教へてくれた。今ネットで確かめたらそんな痕跡全くない。長い間騙されてゐたやうだ。先輩を信じるかネットを信じるか迷ふところである。（喜孝）

梅雨ふかし夫の好みし白檀香

長崎桂子

梅雨の室内は、雨のにおいに満ちていています。鬱々とした気分を変えたくなり、作者は夫君の好んでいた白檀の香を焚いて、気分を変えます。白檀香の匂いが夫君との思い出を呼び覚ましている余情を読み取ります。（大佳）

＊＊＊

かをりで亡き人を偲ぶ。私にはありえない落ち着いたたつきぶり。雅なことである。とても香りで、人をしのぶ優雅さをもちあはせてゐない。私ごとだがここに引越してからは火を使はない。炎を見ることはない。粗相のないやうに生活してゐる。線香も全て古い家に置いてきた。妻の前には香炉はなく晩酌のお供の盃がある。掲句をしみじみ味はった。「梅雨ふかし」が深く重い。（喜孝）

薔薇の香のソフトクリーム持て余す

森なほ子

薔薇の名所に観光に行ったのでしょうか。観光用の売店に薔薇にまつわる色々なものを売っていて、作者は限定販売の薔薇風味のソフトクリームを買ったと想像します。好奇心で買ってみたけど、どうにも食が進まない。作者の冒険心と持て余した様子に共感します。（大佳）

黒姫（くろひめ）山は雲とたはむれ夏はじめ

森なほ子

黒姫山は長野県にあり二千メートルを越え信濃富士と称ばれてゐるといふ。信濃富士と称されるから辺りに目立つ山なのであらう。

季節の変り目を知らせる夏の雲が黒姫山と戯れてゐる。大景に心をあそばせる作者。奇を衒はぬ表現が心地よい。悠々の時を作者とともにできる一句である。（喜孝）

夕刊の二時半に来る青時雨

赤座典子

夕刊の名に反して二時半に来たので、呆れている作者。これでは昼刊ではないか？雨上がりの庭木からハラハラと青時雨が……。早すぎる夕刊とこの季語が季節感を盛り上げます。ちなみに我が家は深夜三時半に朝刊が来ます。眠りの浅い時はバイクの音で起こされます。その大変さを思えば文句は言えませんが。（なほ子）

山菜のたたきのとろみ梅雨に入る　　赤座典子

夏になると父の里から送られてくるものの中に「みず」といふ山菜が入ってゐる。父の里は秋田。ミズはミズナ・ウハバミサウといふ根の赤い山菜である。俎板の上で味噌と一緒にひたすらたたく。音と共我が家の初夏の風物詩。

季語は素直に付けられたのかもしれぬが季節感を見事に捉へてゐる。わたしはごはんにのせて食べたが作者はお酒の肴かもしれない。それにしても作者は食べ物俳句の名手である。（喜孝）

幹白きでででむしの跡白日夢　　秋川　泉

重い夏風邪を引かれた中での出句とお聞きしました。この句は、熱の高い時のことを詠まれたのかも知れないと思う。リアルな前半と、そのリアルさがかえって幻覚を疑わせる下五。不思議な味わいの句と思います。（なほ子）

眠気差すおきどころなき夏の風邪　秋川泉

本来「身の置きどころなき」だが、「身の」を省略し「夏の風邪」に接いだことにより化学変化が起こった。熱に魘されるあの奇怪な不愉快な感触、同じところへ何度も戻される感覚はつらいものである。泉さんは俳句の初心者だといつも謙遜されるが、この様な夏風邪の句を成す人は初心者とは云ひ難い。

もう一句「幹白きでででむしの跡白日夢」。熱に魘されてゐるときの気持ちの悪い感覚が見事に描かれてゐる。「白日夢」がどのやうにとは云へぬが、そしてどのやうにすればよいかとも云へぬが、推敲の価値のある俳句である。（喜孝）

朝湯してまた寝ころぶや風薫る　　七郎衛門吉保

なんと気持ち良さそうな。季語の効果が小原庄助化を防いでいます。悠々自適、季節を満喫しておられます。誰でも真似できそうで、なかなか出来ない薫風の味わい方、緑多いご自宅なればこそ。（なほ子）

庭の墓道に出るなと云ひ聞かす　　七郎衛門吉保

吉保さんのお庭に墓が生息してゐると聞いたことがある。しばらく姿を見ないと案じられるとも聞いた。そのやうな安穏な地を墓はなぜ出てゆくのだらう。「山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ」に近い感情を墓も持ってゐるのだらうか。路上で車で轢かれて皮だけになったものを何回見た。吉保さんの心遣ひが通じることを願ってます。

蟾蜍で思ひだすのは中野坂上で歌ひ飲んだ後、高円寺の自宅へ歩いて帰還する。わたしも蹤いてゆく。何の話をしたのか思ひだせぬが二人とも黙って歩くタイプではない。途中に宝仙寺の墓域の脇を通る。どのやうに抜け出してくるのか墓がのたりのたりと歩いてゐる。外灯も少ない夜道で茂さんはよく見付ける。素手でつかんで墓地に抛りこむ。きっと作者のやうに云ひ聞かせて

ゐるのだらう。

この宝仙寺で高島茂の葬儀が行われた。（喜孝）

「一転勝訴」燕一家の居住権　　篠田純子

連作で見ると、燕が営巣していたビルが解体することとなって、燕の巣は撤去されかかったけど残されたという事情がわかります。掲句単独で読むと、人権を取得した燕が居住権を得るために、子育ての傍ら、徹夜で燕六法を開いて、占有権の判例を調べて、人間と論戦した結果勝利を収めた健気な様子を想像します。（大佳）

空也上人のアキレス腱の清々し　　篠田純子

空也上人は芭蕉の「乾鮭も空也の痩も寒の中」で知る以上は知らない。修行のすゑに痩躯となられた上人の「アキレス腱」を捉へたところに感心した。ここで上人のお姿を人格を表現されてゐる。「清々し」は見事。芭蕉の句に添へた作品。（喜孝）

薫風やいまだ名の無きうたごころ　　篠田大佳

心地よい薫風、胸に溢れて来るものを「うたごころ」という言葉で表現された。「歌心」は和歌の言葉のようだが、ここでは詩、和歌、俳句などに分類される前の詩情そのものを言っていると

思われます。胸に湧いて来る詩情は若さの証明。「うたごころ」という言葉には、俳句より和歌に馴染む朗唱性があると思います。（なほ子）

羽田行の機影外苑通過梅雨　　篠田大佳

南風時に15時から9時に羽田空港に到着する航路に板橋区～豊島区～新宿区～港区と、もう一つ練馬区～中野区～渋谷区～品川区と通過する航路がある。夕方空を見てゐると飛行機がどこからともなく湧き出てお腹を見せて陸続と羽田の方へ飛んでゆく。滑走路が間に合ふのかと素人は要らぬ心配をしてしまふほど。作者は複雑な心理描写を書く傍らこのやうに嘱目吟も書かれる。（喜孝）

朝

蟬時雨

長崎桂子

今の住所へ来たのは四十余年前で、その頃は朝早くから賑やかでしたが、今はすっかり変り、朝の挨拶を交す方と出会う事はほとんど御座いません。

今年も七月二十日すぎから朝の蟬時雨は例年よりややさしいなとは思いますが、今朝もを賛美してくれます。喜びの時間です。

朝寒と挨拶かはし塵すてる
山襞のあきらけき朝梅の花
朝より眩しき日差し蟬時雨
眞冬日の朝のつぶやき関節に
蕗の薹の香に充たさるる今朝の膳
初霜に朝餉の椀をいつくしむ

夜行性

秋川　泉

私は夜行性。しかし、夏の朝だけは格別。空が白み始める四時頃から、太陽が昇る頃が最も好きで、この時間だけは外に出て活動したい。この時ばかりは、澄んだ空気と光を存分に味わいたい。庭仕事でも草むしりでも、散歩でもバイクで思い切り走りたくもなる。太陽が顔を出すその時が心躍るのだ。この時、精神が解放され一日で最も幸せな気持ちになれる。しかし、冬の太陽が昇る前のその時間は、何よりも寒くて辛い。

何と云っても夏らしい夏の晴れやかな明け方に勝るものはない。

初大師海山に謝す今朝の膳
枇杷を喰ふ小鳥の朝のにぎにぎし
朝靄の底よりぬっと火焔茸
正月は父の命日雨の朝
たはむれて若布をひろふ朝の浜

早起きは苦手

須賀敏子

宵っ張りの私、早起きは苦手です。
遠くの山へ行く日は朝五時起きで、前の晩はとても緊張します。

鈴蘭の香り微かに山の朝
凍る朝鏡の前で気合入れ
鈴蘭の四五本咲けり嫁ぐ朝
朝寒や夫単身も二年目に
ペンションの朝の食卓山法師
朝時雨今日はゆつくり寝てゐたし
朝焼の空に近づくチチカカ湖
今朝も又金門橋は霧の中
朝ドラに母の故郷の稲田道

朝のテレビ体操

都築繁子

早朝6時25分から35分まで10分間のテレビ体操を楽しんでいます。

3年ほど前転倒して骨折するまではテニスコートのある運動広場で週2回サンクラブ主催のラジオ体操をしたりしてましたが今は立って運動出来ず、自宅で椅子に掛けたり、立ったりして身体を動かしています。

マイペースながら日常生活が過ごせる事に幸せを感じます。

出来ること数へて安堵今朝の秋
今朝の秋出しを効かせたお味噌汁
今朝の秋大きな卓の一人膳
プランタのハーブを摘めり今朝の秋

あとがき

短文のお願ひ　題「おトイレ」

コロナ禍の始まった年の二月の「あをやぎ句会」行く途次の「大門」で乗り替へた浅草線。旧正月の休暇でアジアの観光客で成田行は大きなトラベル、スーツケースと中国語で車内が混雑してゐた。翌月から句会もしばらくお休みになったと記憶してゐる。旧正月の観光客を止めてゐたら、など、タラネバな思ひを当時はしたものだ。今は多くの外国からのお客さんが復活して日本の食べ物やトイレについて発信している。目を見張るほど公衆トイレの清潔さは痔疾を持ってゐる私には特にありがたい。

私の水洗トイレとのはじめての出会ひは小学生の頃だったと思ふ。母は宗教が趣味のやうに手あたり次第取り替へてゐた。立正佼成会・天理教・近くの拝み屋さん・創価学会、まだ私の知らないところにも行ってゐたと思ふ。その杉並区の佼成会の建物の中で出会ったのが初めて。戸惑った記憶が残ってゐる。街に下水が完備して水洗になったのはそれから数十年後の事。前に書いた気がするのですが、山歩きをしてゐた頃、早朝着いた「好摩駅」のトイレは、素晴らしかった。都会の駅ではスピーカーの野鳥が日がな一日啼いてゐるが、そこでは生のカッコーが啼き、手入れの良いトイレは臭ひもなかった。

「おトイレ」と「お風呂」は健康維持と精神安定と生活の中に重要な場所です。よろしくお願い申します。

（喜孝）

二〇二三年十月号
発行日　十月二十二日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）45864 02
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）